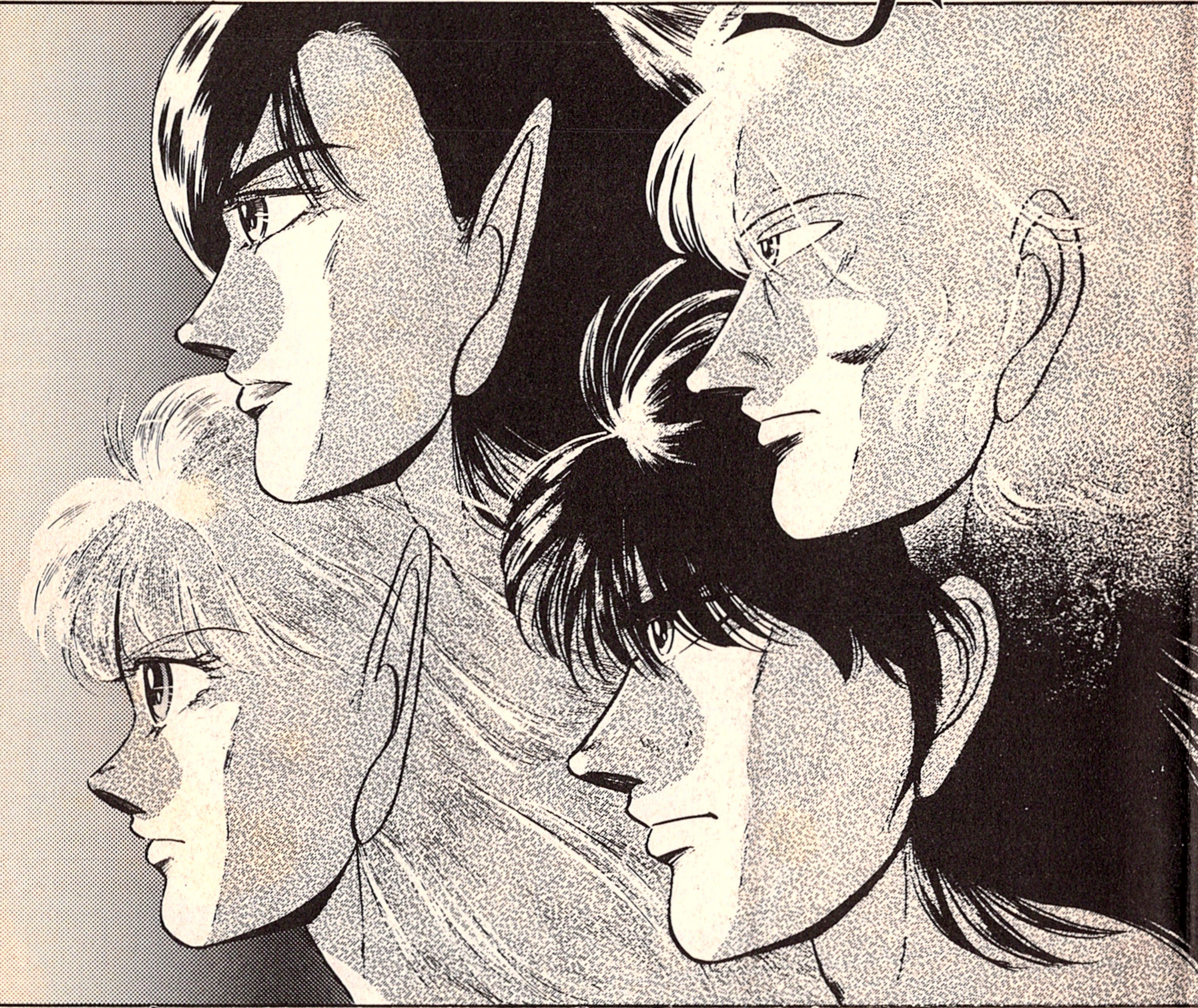
Wizardry®



ウィザードリィ外伝

ギルの 迷宮

ウィザードリィ外伝①
最終話

「跳躍」

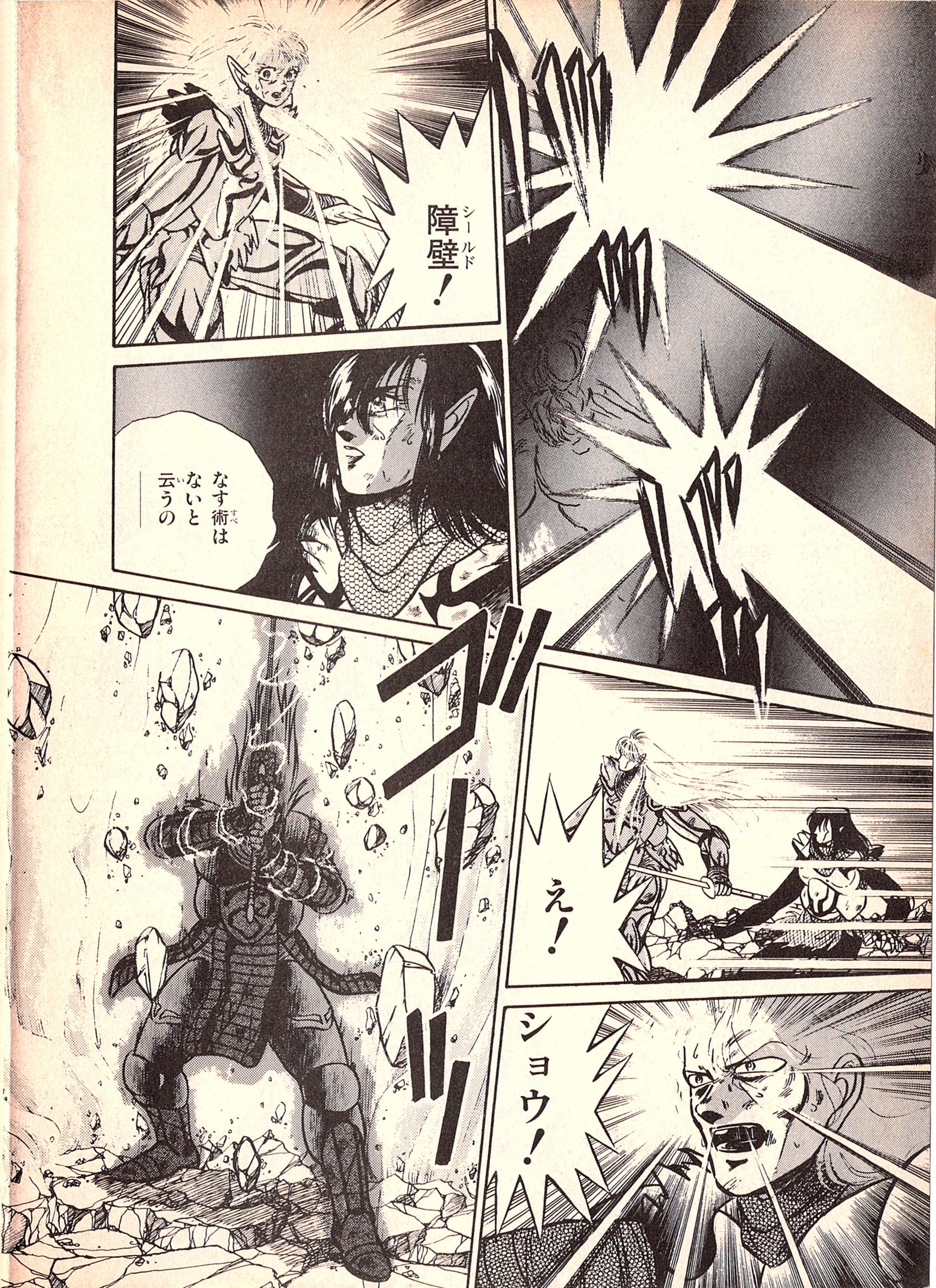
作/石垣環

魔導士ギルに最後の戦いを臨むショウ！ ウィザードリィ外伝第一部ここに完結!!

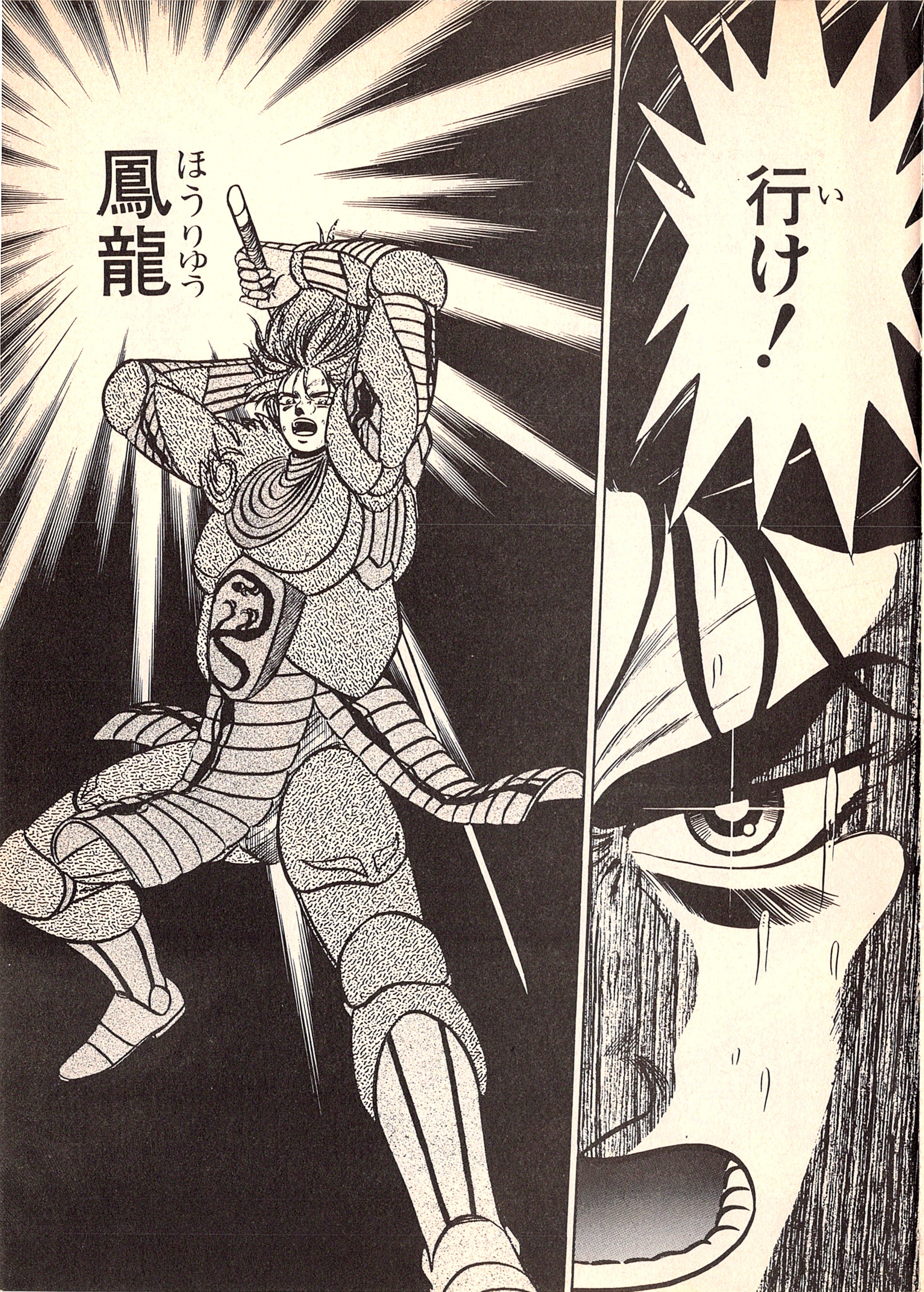


何となく
わかったよ
リルガミンの
守護神が
何故ギル
あんたを
排除せよと
命じたか
これは
この世界には
不必要な
ものだからだ！
現象化よ！
来るわ!!
す、すごい
邪気――
己の生命すら
燃やし尽すと
云われ
禁じられた
侍の剣術の
極意中の
極意――

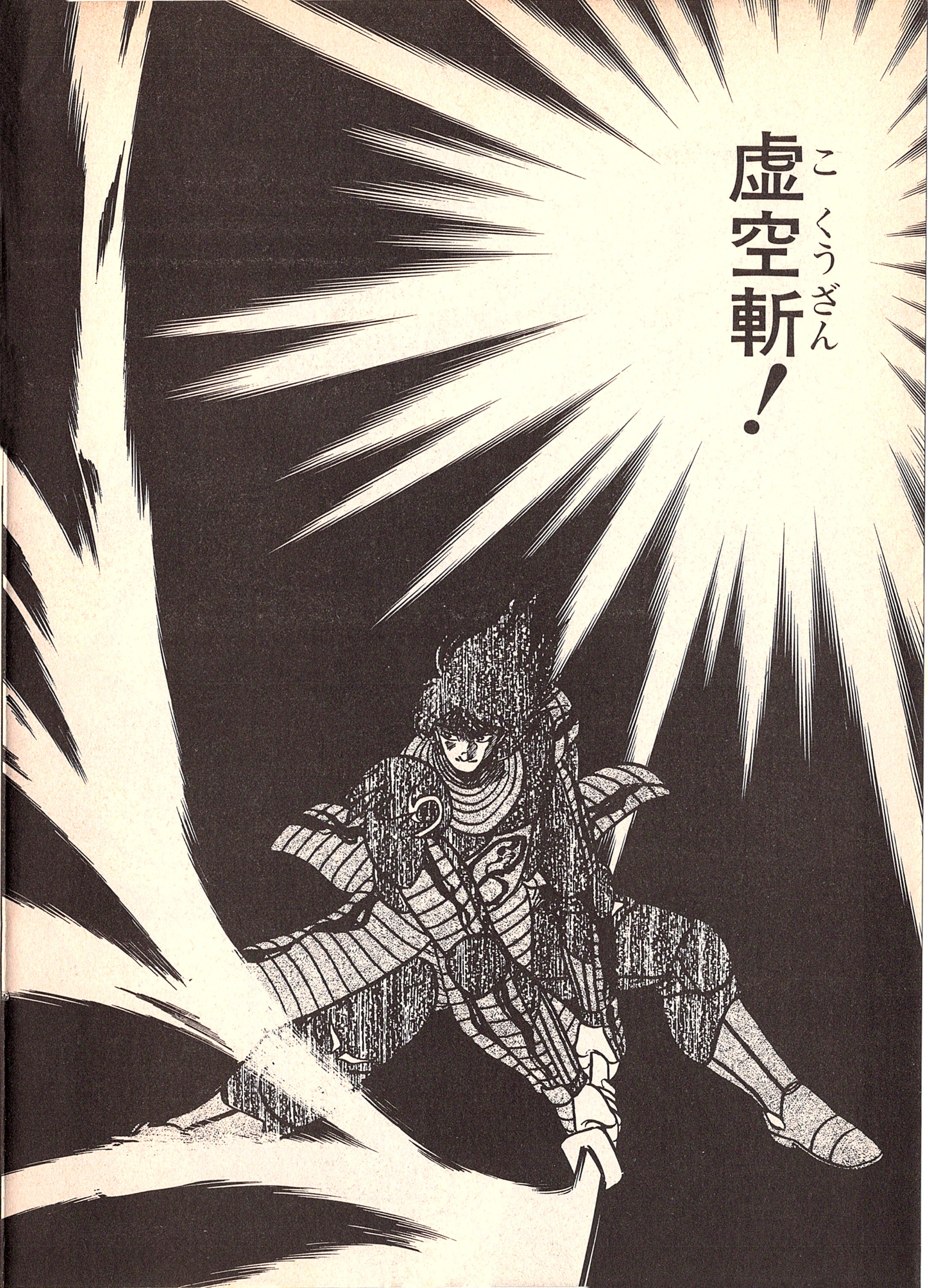

何をしようとしているかわからんが「召喚の書」によって私は人を超えたのだ!!
それをショウ!
くッ
そ!

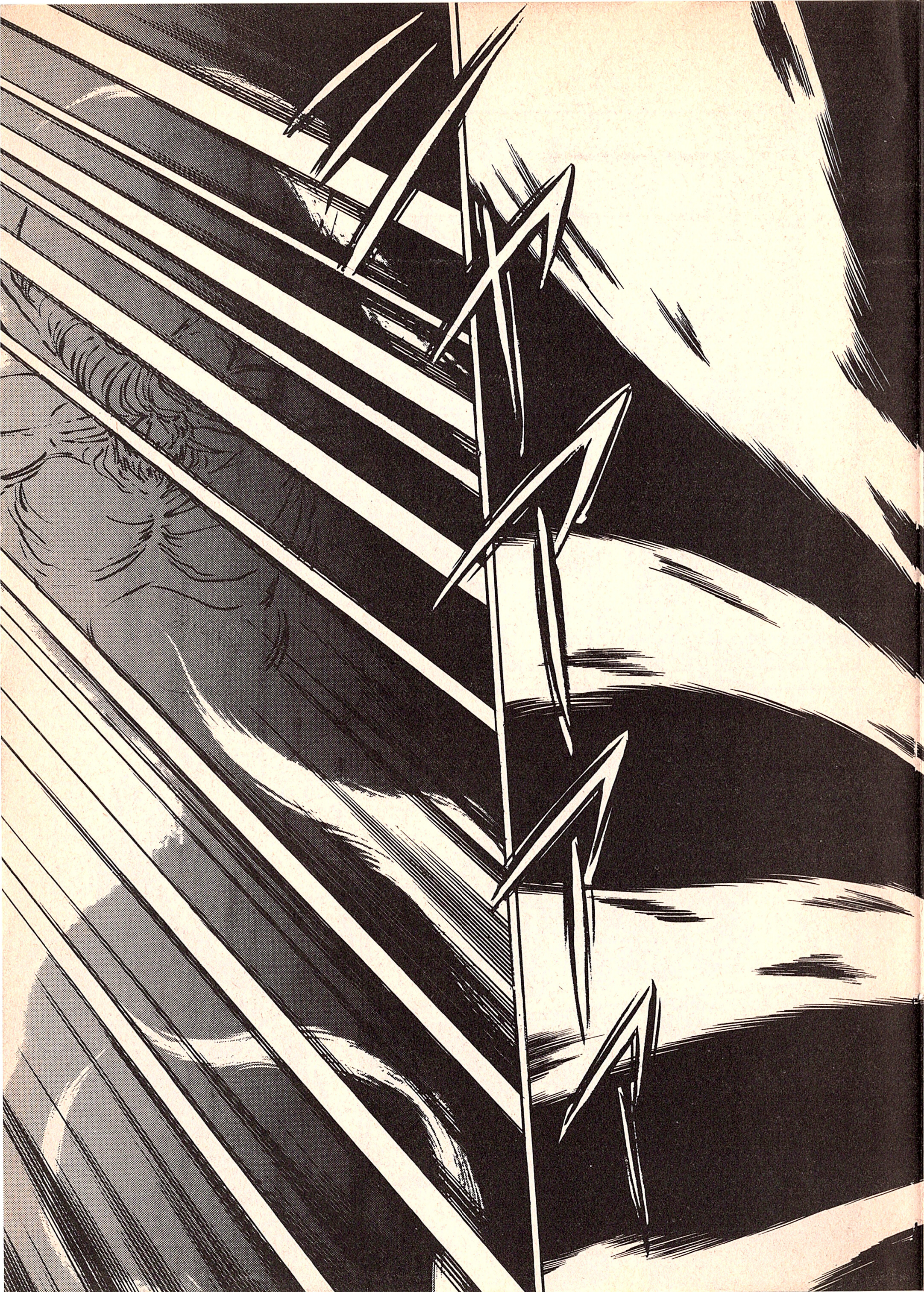


障壁(シールド)!
なす術(すべ)はないと云(い)うの
ゴゴゴゴ
え!
ショウ!



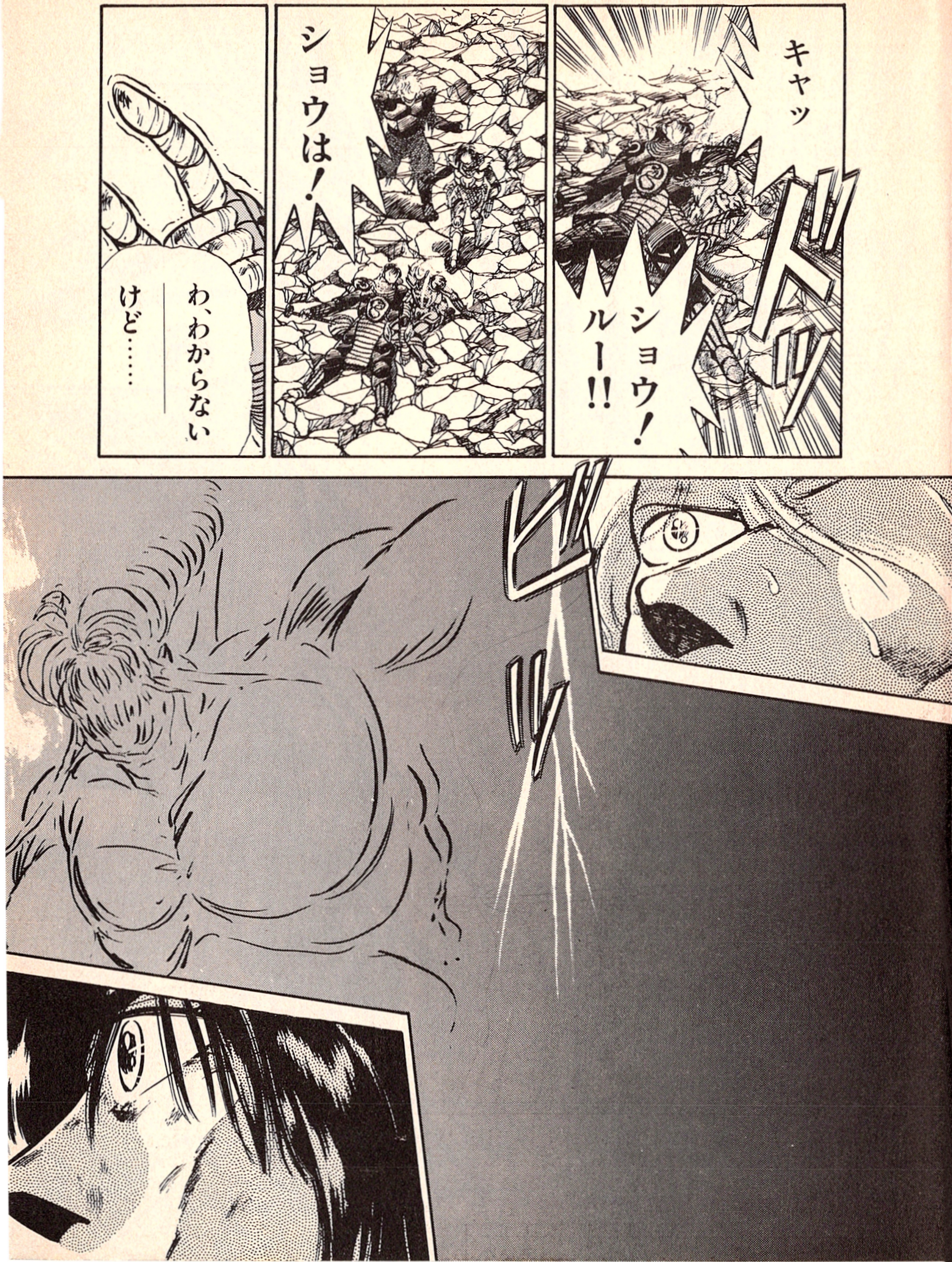
行け！
鳳龍


虚空斬（こくうざん）！

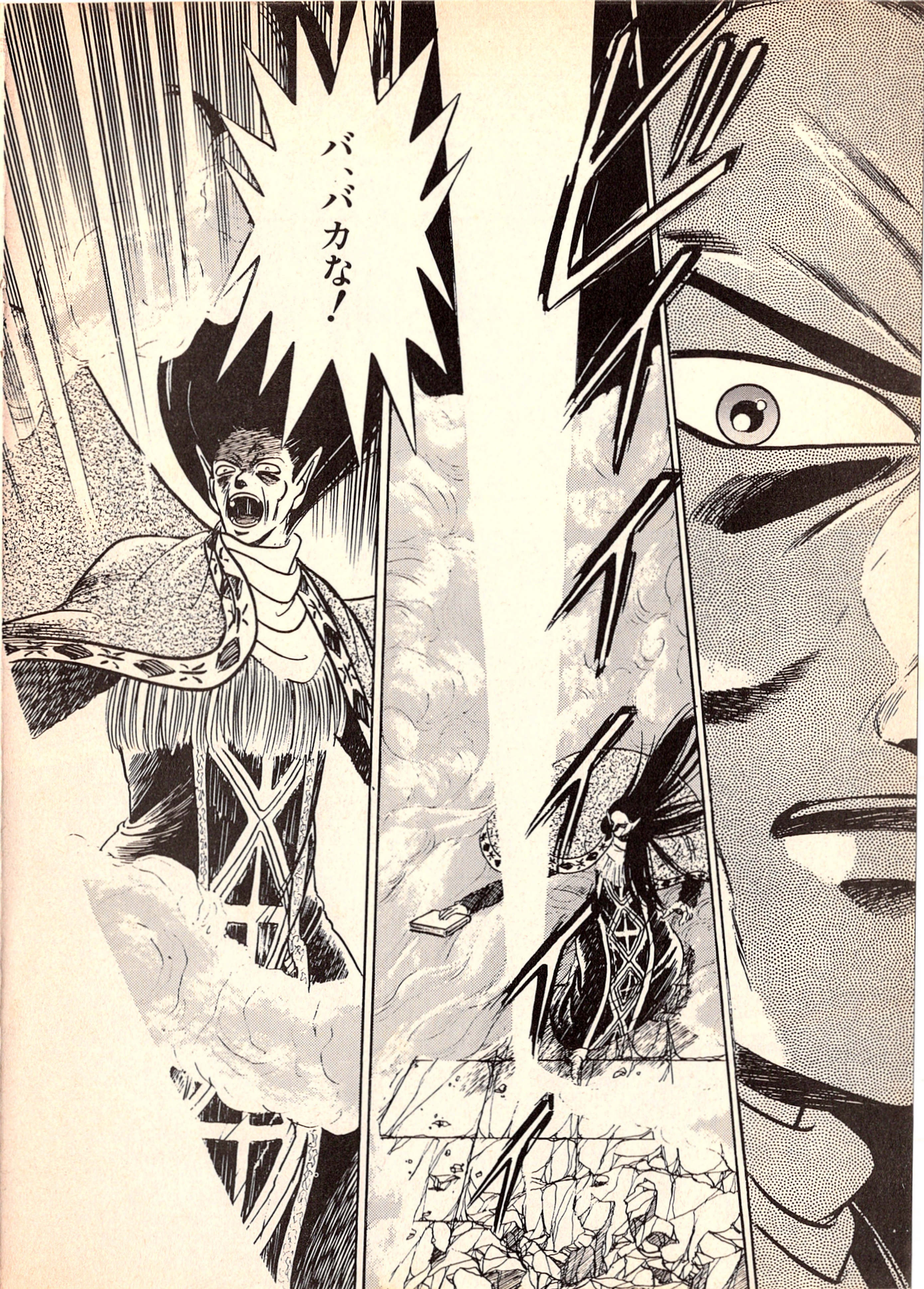




ガクッ
その若さで「変異」を唱えられる程の実力を有しながら実に愚かしいことよ――
ググッ
愚かしいか―どうか自―分の―身体で確かめて―
ハァ ハァ
ショウ!
え



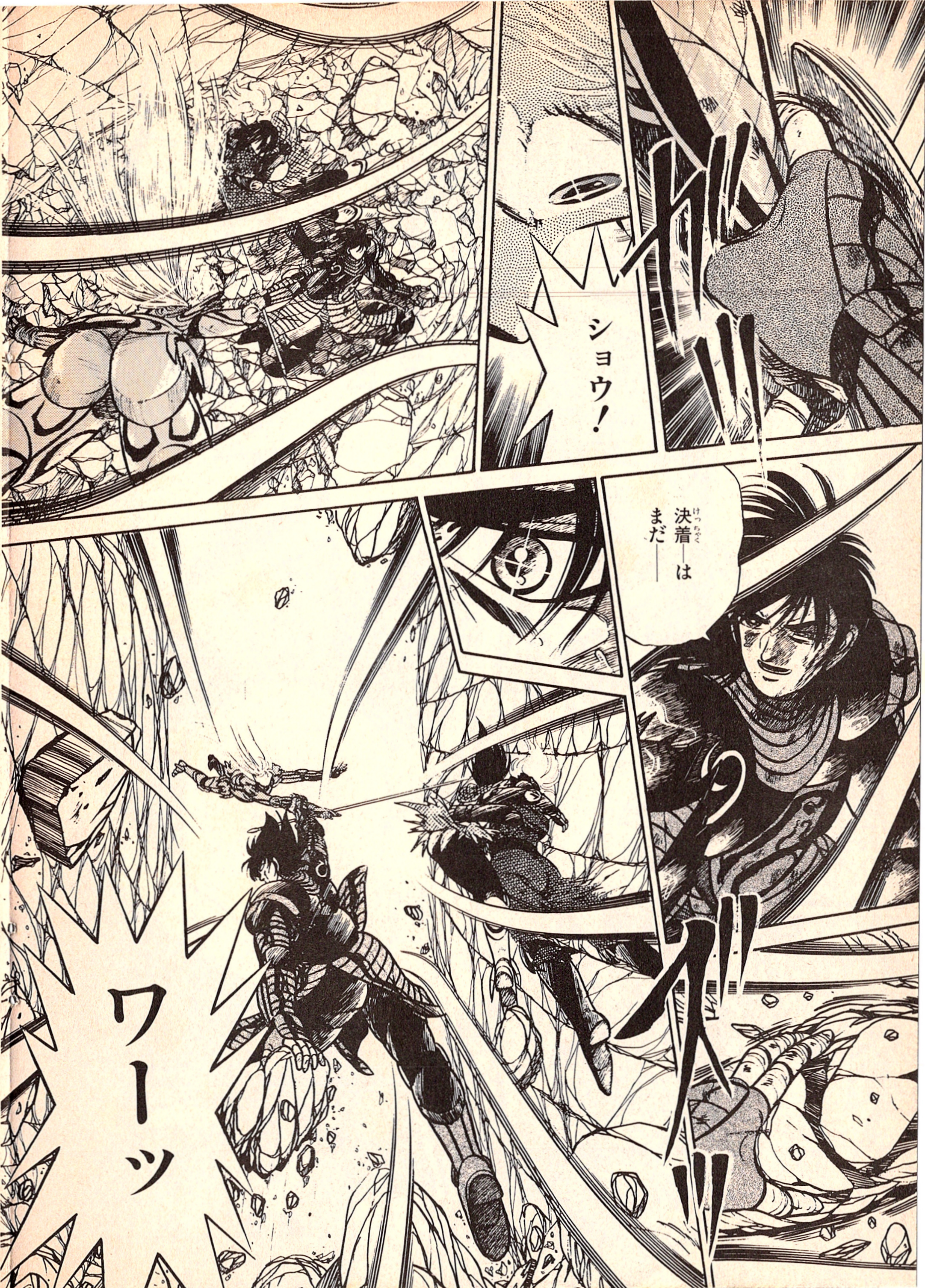
キャッ
ドドッ
ショウ！ルー!!
ショウは！
わ、わからないけど……

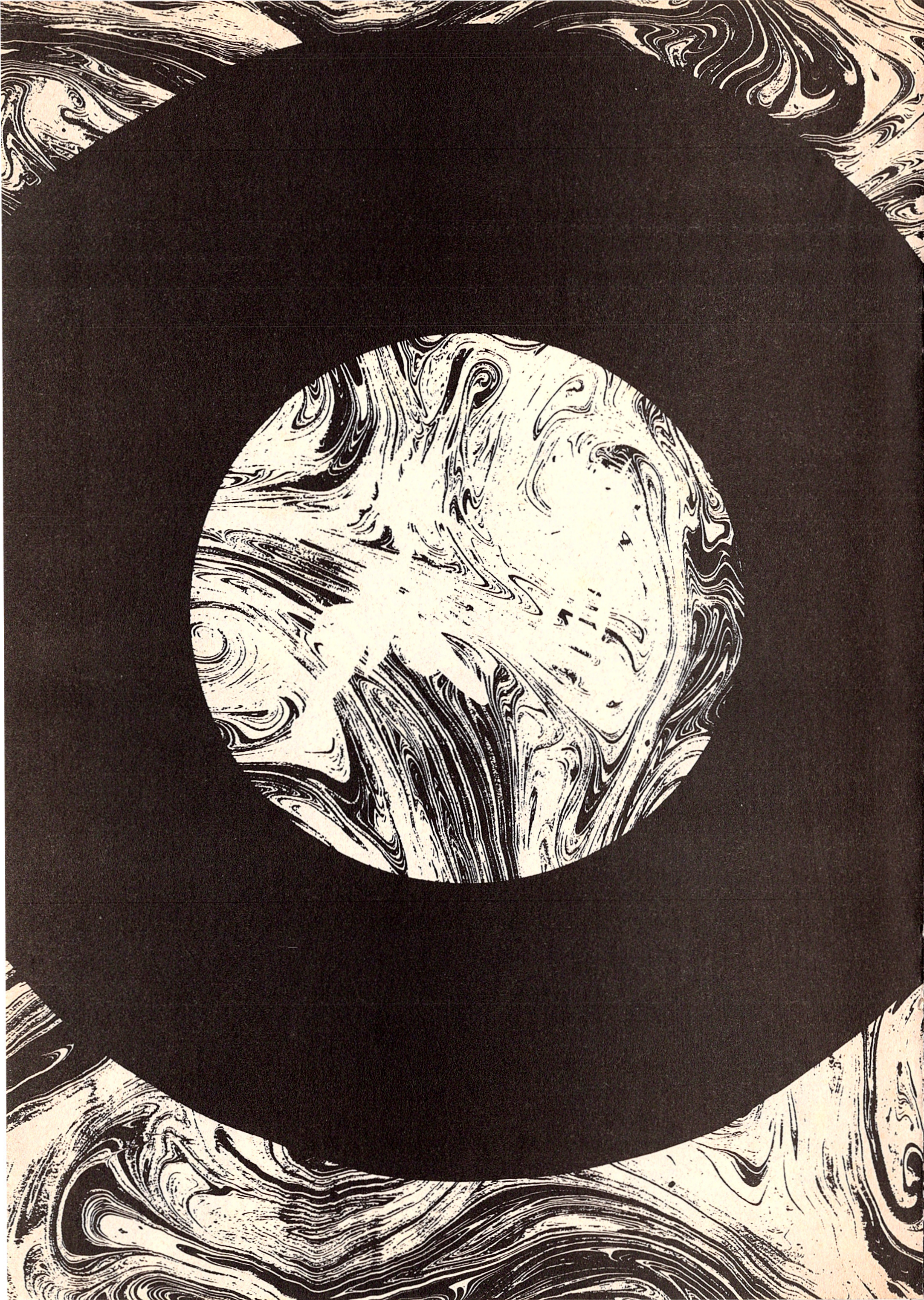

バ、バカな！

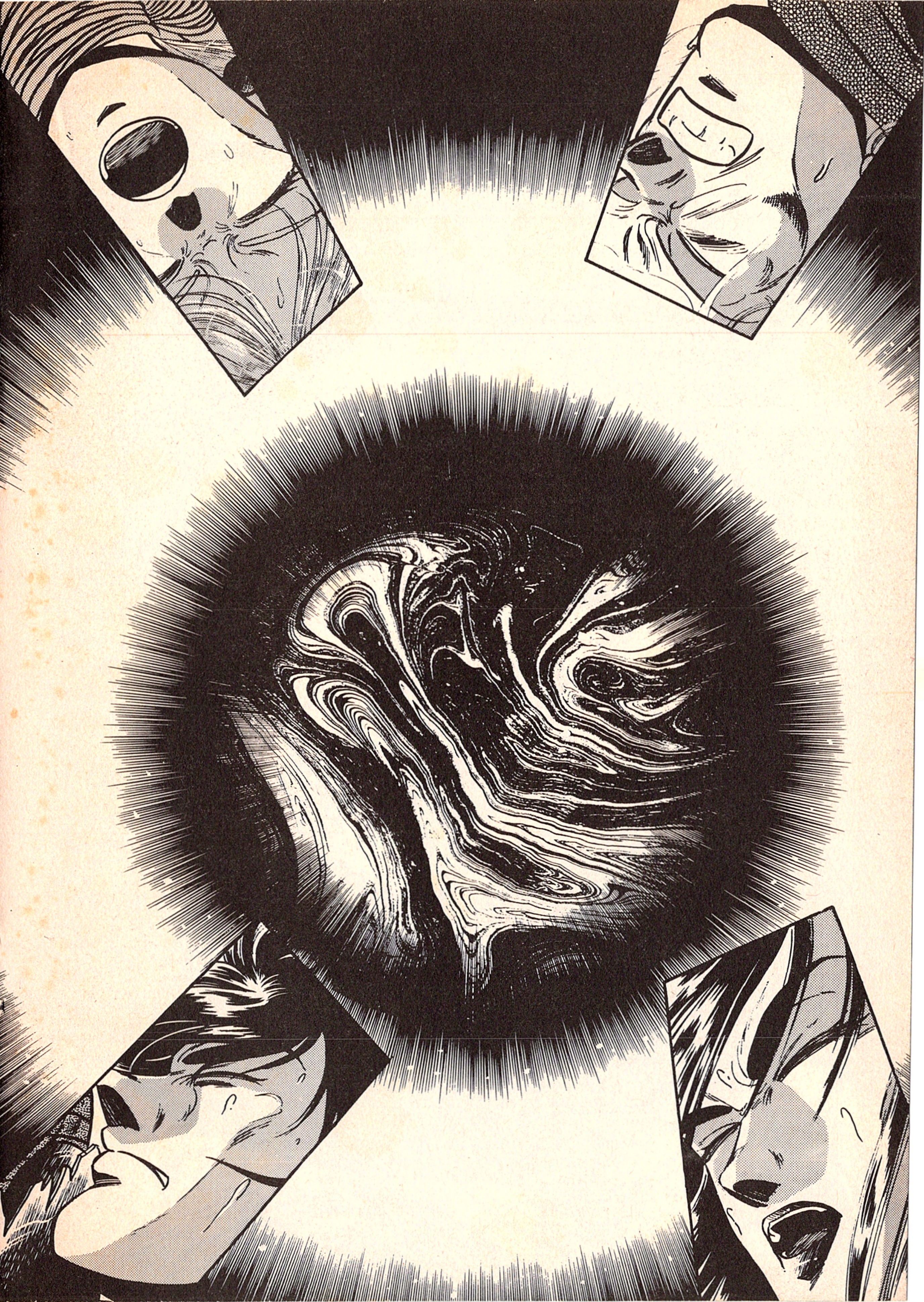

空間を斬り裂くなど――!!

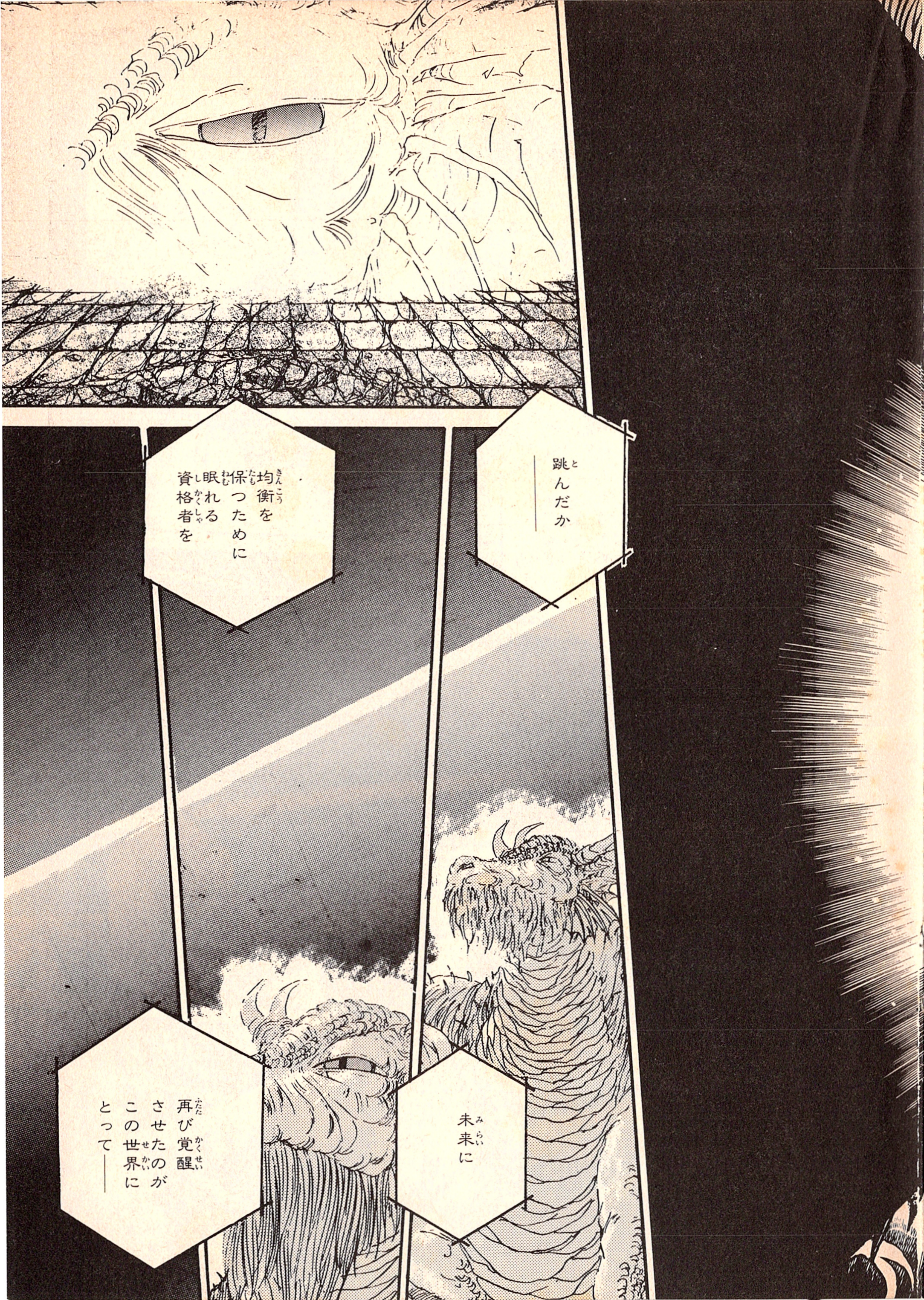

ま、まずいぞ
これは――
な、何!
一時的にせよ「無」が生じたせいで空間が傷口を塞ごうとして身悶えしてるんだ!!
フッ・・・
まして異界から化物が出現しようとしていた矢先だ!


膿を吐き出さんとしているんだ
何処に跳ばされるかわからんぞ!
この恨み
お、おのれ私の理想私の夢を
許さん若僧——
キャッ
姫将軍!

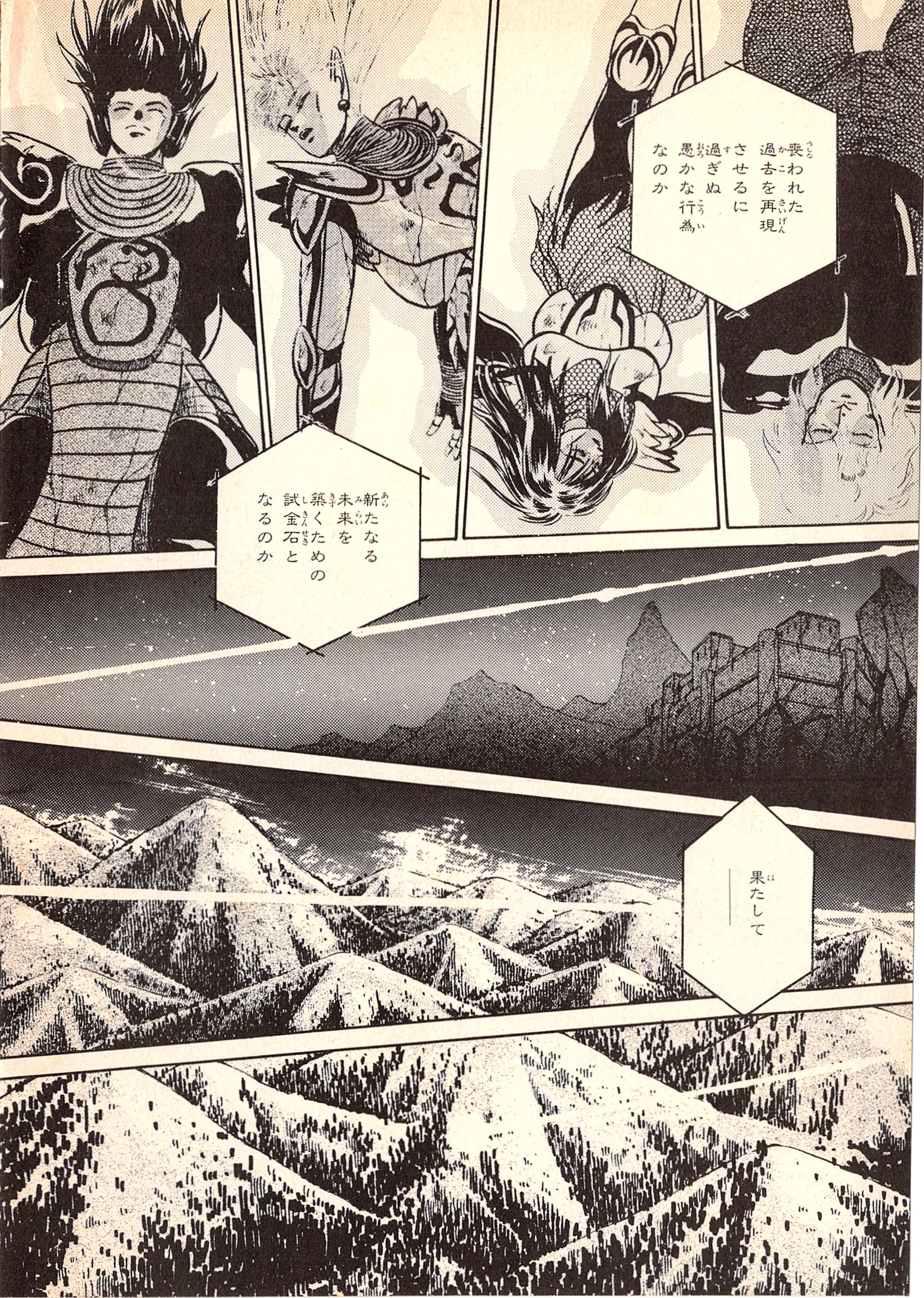

ショウ！
決着──は
まだ──
ワーッ



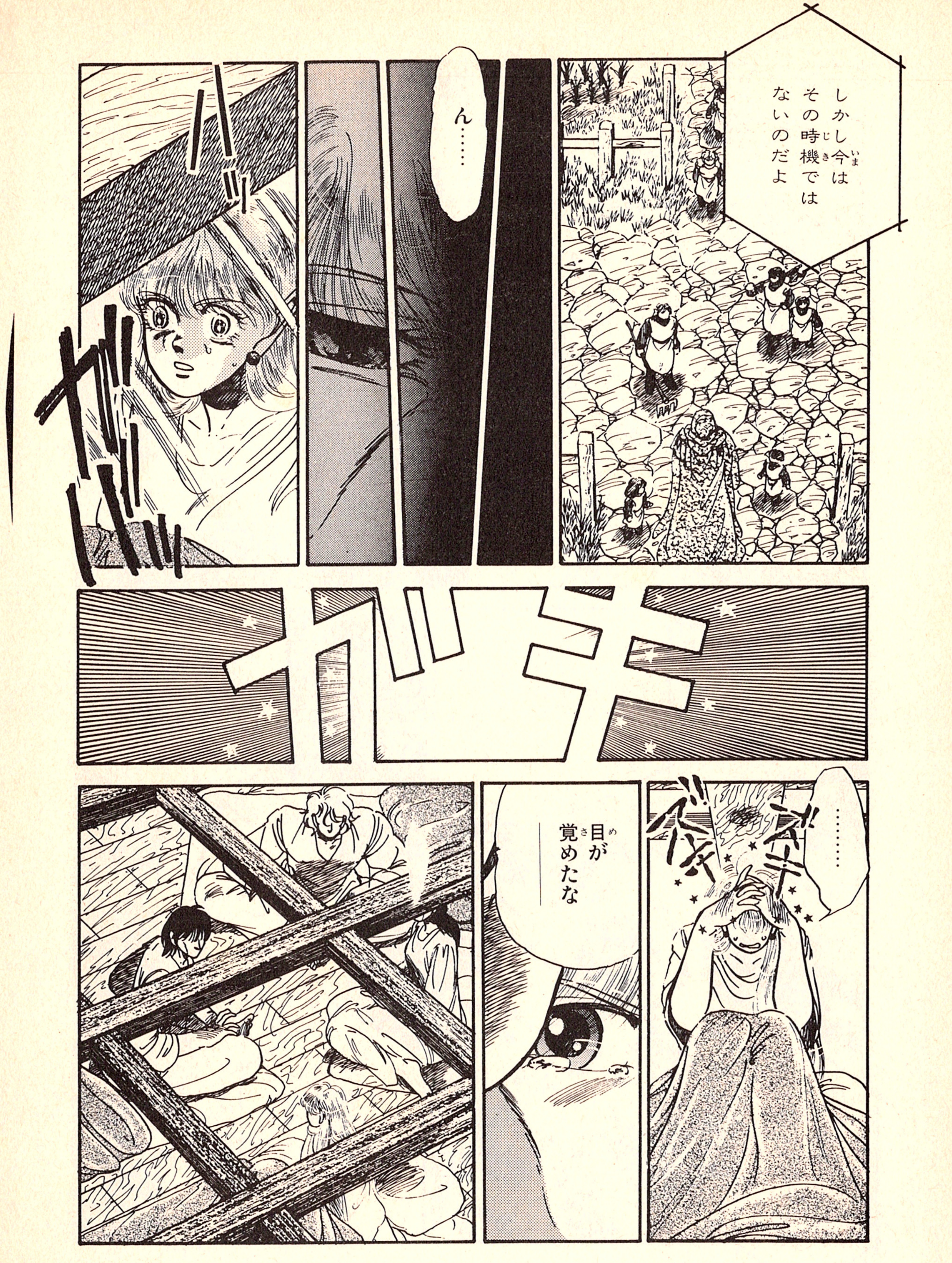


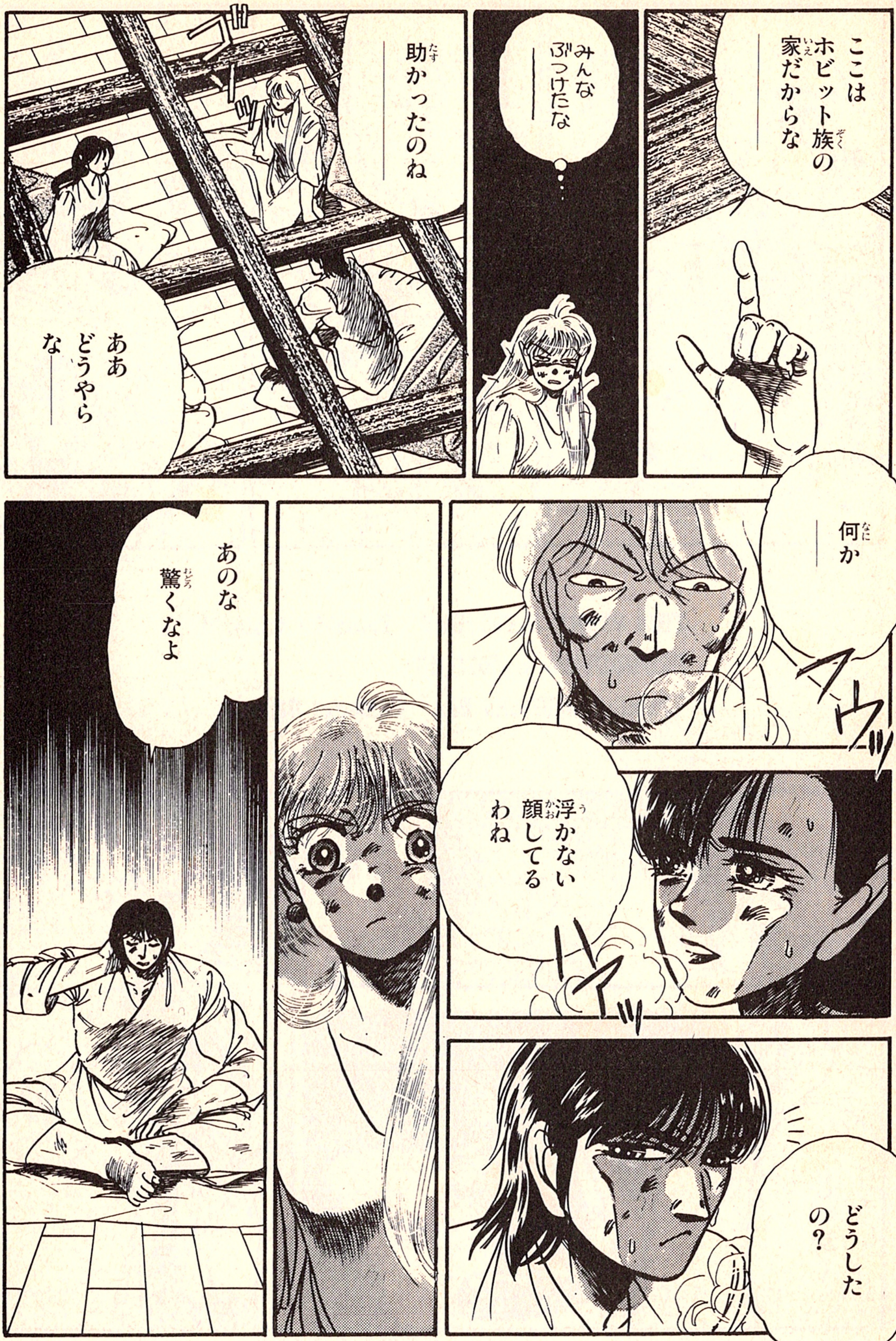


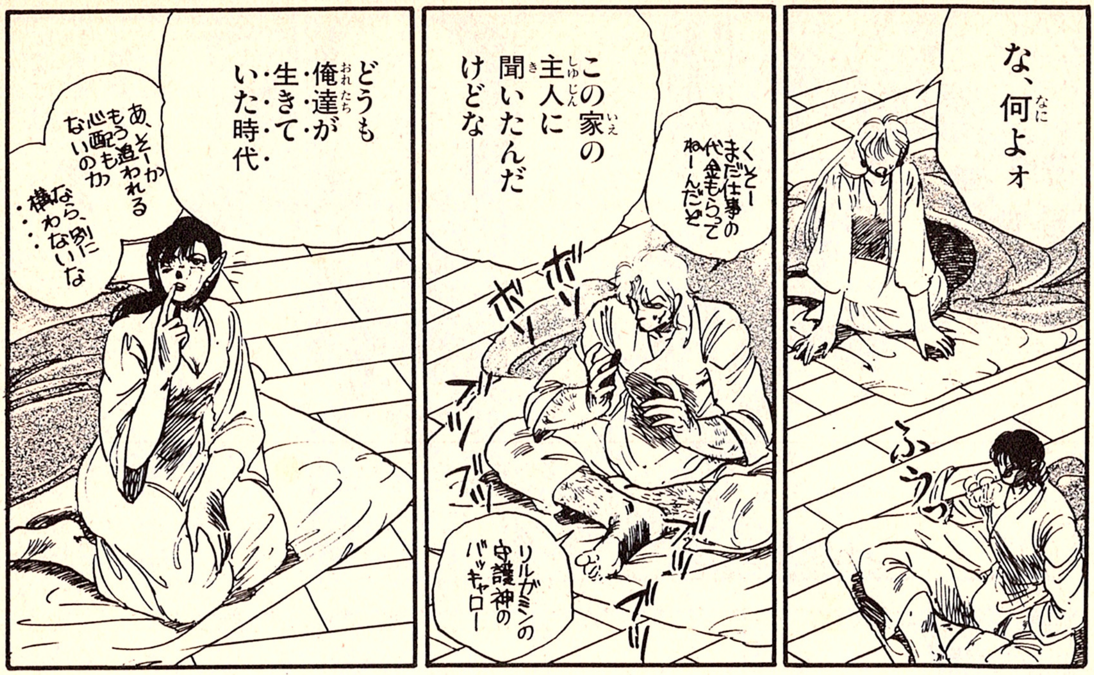
跳んだか
均衡を
保つために
眠れる
資格者を
再び覚醒
させたのが
この世界に
とって——
未来に


喪われた過去を再現させるに過ぎぬ愚かな行為なのか
新たなる未来を築くための試金石となるのか
果たして

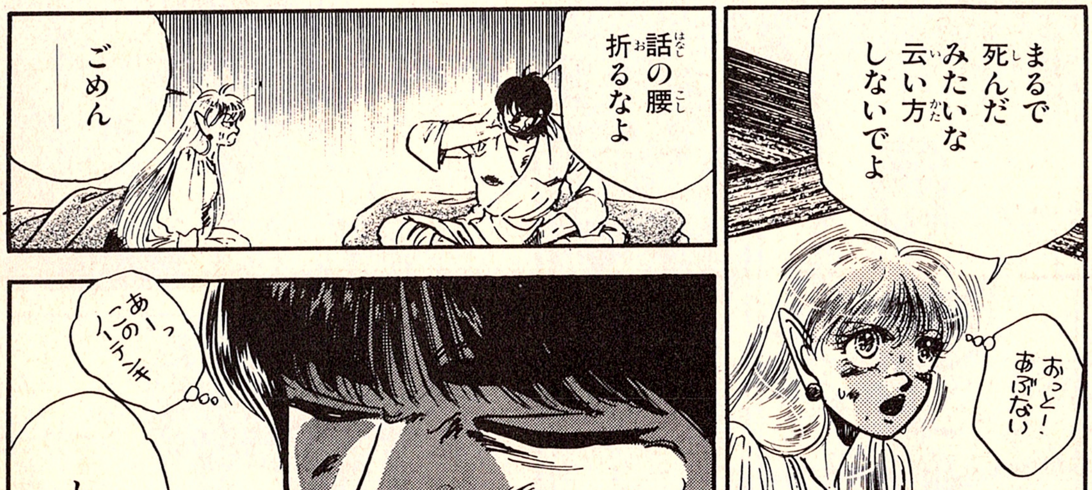

この辺りでよかろう
ギルか
彼奴もこの辺りの時間に跳ばされたか——
スーッ
こちらの世界に戻って来るとはな——
彼奴もまた「守護者」の資格を持つ者であったと云うことか
惜しむべきことよ——

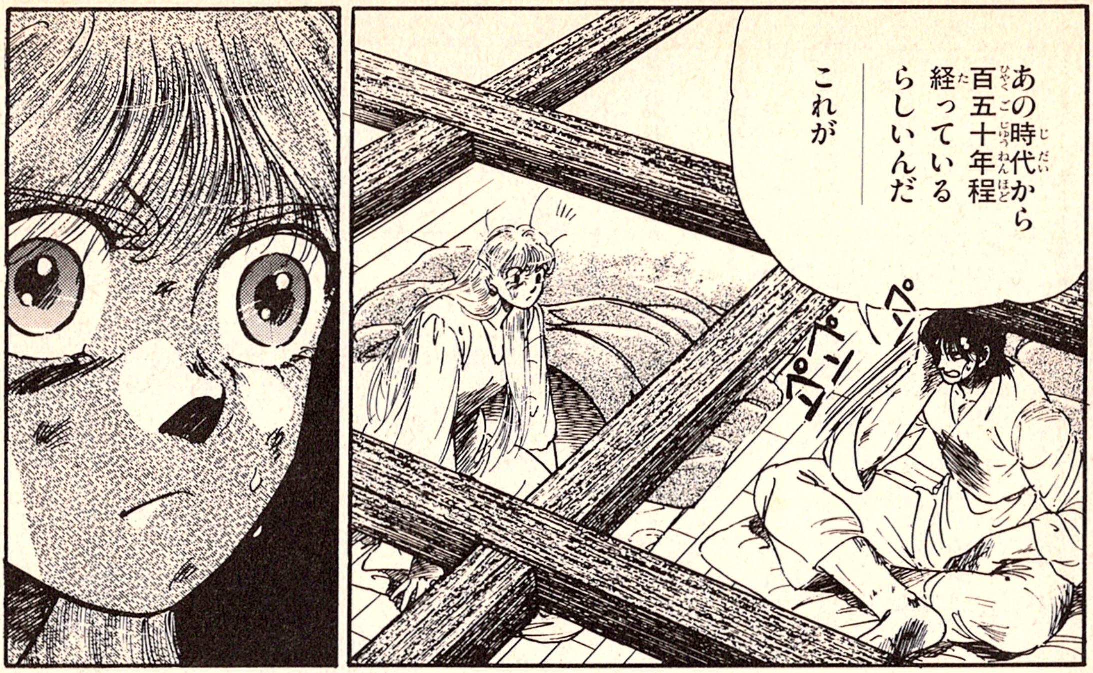

しかし今は
その時機では
ないのだよ
ん……
ハッ
………
ズキ
ズキ
目が覚めたな


ここは
ホビット族の
家だからな
みんな
ぶつけたな
助かったのね
ああ
どうやら
な
何か
フウッ
浮かない
顔してる
わね
ハァッ
どうした
の？
あのな
驚くなよ

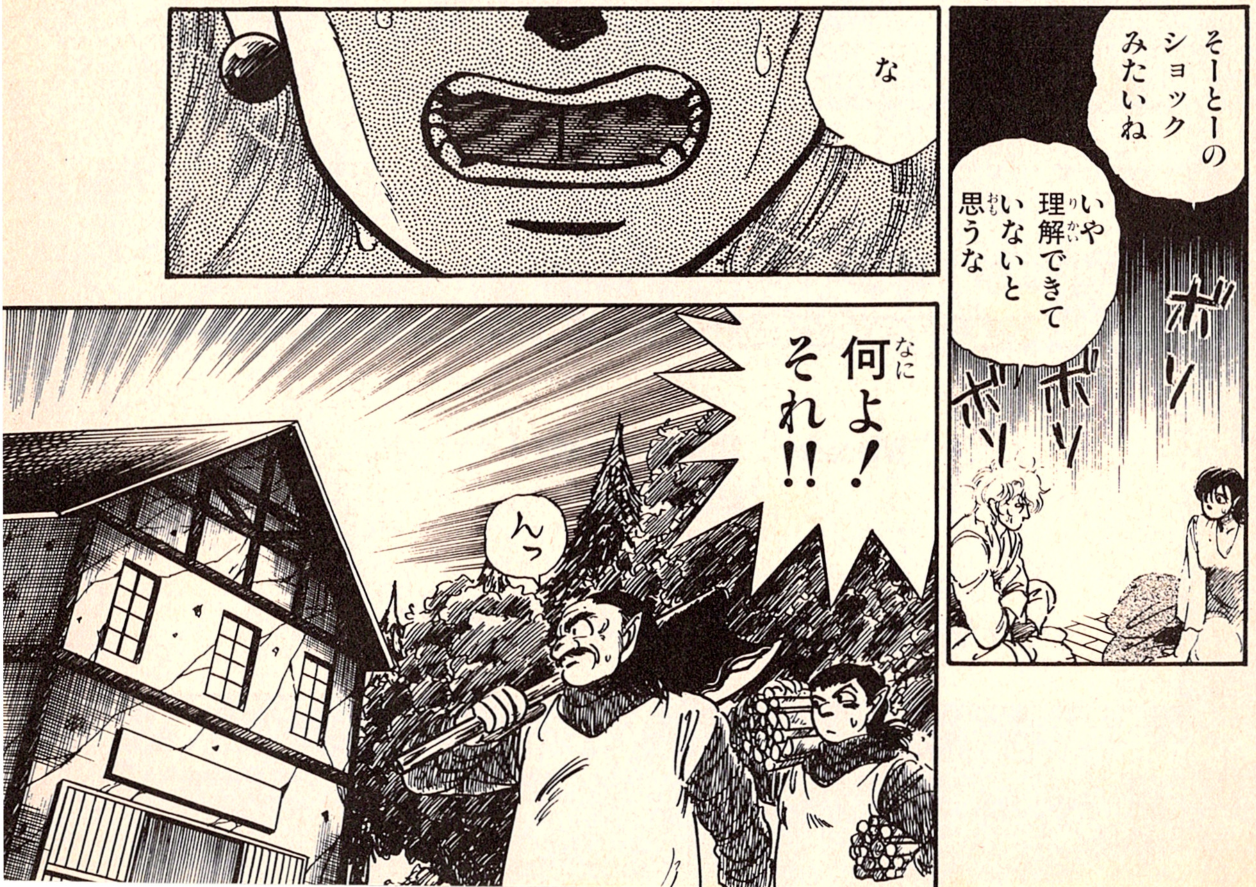


THIS STORY & PICTURE : Tamaki・Ishigaki
PRODUCTION & EDITING :
"Fami-Com Hissho Bon" Editorial Office





ALL STAFF : Yoshinobu・Yamaguchi, Kazumi・Tohjoh, Kazumi・Sakamoto, Sachiko・Hatano, Tetsuhiro・Sakuyama, and Noa・Misaki.





"Wizardry" Other episode I ――
"Gill's Maze"

END

ウィザードリィ外伝第一部"ギルの迷宮"　完

次号Vol.4(2.2発売)よりウィザードリィ外伝第2部"鳳凰の塔"が連載開始!!
御期待ください!なお"ギルの迷宮"は2月下旬に単行本で発売予定です。

風よ。龍に届いているか

第8回

探魂の呪文が無効化された迷宮内部。
消えたパーティの手掛かりを求め、
暗き迷路へと向かう冒険者たち。
闇に潜むのは聖か、魔か
行く手に待つのは生か、死か——



作／ベニー松山
イラスト／高橋政輝

〔第八章〕召喚

宿の二階には、階下に比べて大きめの寝室が並んでいる。これは二階の個室やスイートルームを利用するのが、ほとんど人間やエルフに限られているためだ。

今でこそ人間以外の種族が都市に住むのは珍しくなくなったが、伝統的に地中に穴を掘って住居としているホビットやノームは、少しでも地面から離れた寝床を嫌う傾向がある。同じ穴居種族でも、鉱業技術に秀でたドワーフは多層構造のばかでかい坑道を造ることもあってか高所の寝泊まりには無頓着だが、やはり一階の簡易寝台や個室のほうが落ち着きやすいようだ。

逆に森林を住処としてきたエルフは、樹上に生活する部族もあるほど高い場所を好む。宿で言うなら、二階がお好みといったところだ。

冒険者の宿はその点を考慮し、館を改装する際に階下の個室は全て小柄な種族向きにしてしまった。ベッドなど、身長が一・九メートルある俺では躰を二つ折りにしても横になれないようなサイズなのだ。

したがって、人間族の俺たちは選択の余地なく二階を利用することになる。二階の寝室が大きいのではなく、一階の部屋が小さいという訳で、何でもこいつはリルガミンの愛すべき女王、我らがベイキ陛下の御立案だそうだ。全く余計なことにばかり頭の回る小娘だ。

俺は自室の前を通り過ぎ、二階のさらに奥へと向かっていた。一室だけある豪華客室――ロイヤルスイートがこの先の突き当たりにある。

そして俺が呼びに行こうとしているエルフのディーは、日に十ゴールドでこの部屋を独占している張本人だった。

廊下を進むにつれ、何やら騒がしい物音が聴こえ始めた。

何かを投げつけているような音と、人の争う声が響いてくる。それも明らかに、五メートルほど先に迫っているロイヤルスイートの扉からだ。

突然、細密な彫刻の施された立派な両開きの扉が、けたたましい音を

前号までのあらすじ

精霊神グニルダの恩寵により、あらゆる外敵から守られ続けてきたリルガミン市。しかしその聖都も原因不明の天変地異に見舞われ、滅亡の一途を辿っていた。異変の原因究明のため王国は多数の冒険者を募り、街の北に聳える禁断の山に隠された神秘の宝珠の探索を命じた。

探索を続けて約一年。冒険者たちは自らの能力を磨き、山中の迷宮は宝珠の守護龍〝ル ケブレスの護る最上層を残して全て踏破された。使命の達成は目前であった。

主人公ジヴラシアは独り迷宮の怪物相手に実戦経験を積み、リルガミンに帰還しようとしていた。その帰途、マイノスたち善のメンバーを連れたガッシュ、ボルフォフらがいよいよ迷宮最上層へと向かう場面に出くわす。直後に出現し、迷宮を指し示す死を告げる精霊バンシー。さらにその夜、夢の中で人を堕落させる夢魔の出現や大規模な地震、そして岩山の山頂の発光現象と続けざまに怪異が起こり始めた。翌朝、消息の途絶えたガッシュらを救助すべく、三隊の善のパーティが迷宮に向かうのだったが――。

主な登場人物

- ジヴラシア……主人公。レベル13の忍者。悪・人間族。この物語の〝俺〟。
- ガッシュ……レベル15の戦士。中立・人間族。
- ザザ……レベル13の僧侶。悪・人間族。
- ディー……レベル13の女魔術師。悪・エルフ。
- マイノス……レベル12のロード。善・人間族。
- フレイ……レベル13の盗賊。中立・ホビット。
- ボルフォフ……レベル13の戦士。中立・ドワーフ。
- アルタリウス……レベル13の僧侶。善・ノーム。
- エレイン……レベル13の魔術師。善・エルフ。
- ハイランス……レベル13の侍。中立・エルフ。他のパーティを率いる。
- ベイキ女王……リルガミン王国の若き女王。
- 〝ル ケブレス……迷宮を支配する龍。〝平衡の守護者〟。

立て開いた。

同時に、若い男が部屋から飛び出してきた。

半裸というより裸に近い、腰にシーツを巻きつけただけの恰好だ。片手に服を抱え、もう一方の手でシーツを押さえながら必死の形相で駆けてくる。正面に立っている俺の姿すら目に入っていない様子だ。

見ている者がいれば、ほとんど男が俺に衝突するタイミングだったろう。だが、この程度の突進が躱せないようでは、迷宮の怪物の相手は務まらない。

俺は躰を軽く捻るに止どめた。

男が俺に触れるか触れないかのところを走り過ぎる。最小の動きで身を躱す〝見切り〟というやつだ。

男を追うように、室内から激しい罵声が飛んできた。

「この阿呆！　下手糞！　×××！」

罵倒語の豊富さでは他の言語の追随を許さない大陸南西部のエルフ語をも駆使した、聞くに耐えない悪態だ。一部は俺の耳も聞くのを拒否した。

続いて羽毛の枕やコップが男の後を追って飛んで行った。

そのうちのひとつが、俺の眼前に迫ってきた。こともあろうに刃渡り二十センチほどの短刀だ。

俺の額に刃先がめり込む直前で短刀は止まった。俺が右の人差し指と中指で、刃を挟んで受け止めたのだ。

そして素早く左手で柄を握り、続けて飛んできた金属製の小箱をその短刀で叩き落とした。

背後で誰かが階段を転げ落ちる音がした。男は無事に、とはいかなかったが何とか逃げおおせたようだ。

飛来物もそれで止んでいた。

「とんだご挨拶だな」

俺は短刀を後ろに投げ捨てた。「これが俺じゃなくてルームサービスだったら、そいつは今頃この場で御陀仏だぜ」

「短刀まで投げたとは思わなかったわよ」

不機嫌そうな女の声が返ってきた。

扉を通して中にもうひとつ、開け放たれた扉が見える。

入ってすぐの居間を挟んで、寝室までが一直線に見渡せた。

男でも三人は楽に寝られそうな大きさのベッドがあり、その上にエルフの女が胡座をかいていた。片手にはまだ、次に投げようとしていたらしい杖を持っている。

細身の、人間なら十八ほどに見える若い女だ。長命のエルフならもう四、五歳は多く見積もらねばならない。

軽くウエーブのかかった淡い緑色の髪が、腰の辺りまで豊かに伸びている。白い肌とその髪との取り合わせが、どことなく高原の木々を思わせる。

人間好みの美形が多いエルフだが、それを考慮に入れてもとびっきりの美女だ。難を言うならもう少し肉付きが欲しいところだが、まあこいつは好みによりけりだろう。

それにしても酷い恰好だった。ガウンを着てはいるものの、ほとんど前がはだけているに等しい。襟の合わせ目が臍まで下がっているため、胸の谷間が丸見えになっている。

しかしこの女──ディーはそれを気にも留めていない様子だった。

「服を着けるぐらいの間は待ってるぜ」

そう言って俺は廊下に面した扉を閉めようとした。

「別にいいわよ。もういい加減慣れっこでしょ」

ディーは杖を放りだすと、吸いかけだったらしい煙管を取り上げて一服した。「中に入って閉めてくれる？　あの馬鹿が派手に出てったせいで、見物人が集まりそうだわ」

俺は言う通りにした。

「あの馬鹿ってのは、今逃げてった男爵家の次男坊のことか」

「あら、良く知ってるわね。でも、残念ながら三男坊よ」

ディーは紫煙を細く吐き出した。「次男のほうは昨日あんたが迷宮探険に出かけてる間に追い出したの」

俺は肩をすくめた。

全く、この女ほど男出入りの絶えない奴も珍しい。この一年余りの間に関わりのあった男は、俺が知っている限りで五十人を下らない。週に一度は相手が代わっている計算だ。
その情熱的な気性が男を惹きつける反面、やはり長続きもさせないのだろう。一度頭に血が上ると短刀まで投げつけてくるとあっては、生半可な根性の男に御せるものではない。
激しい気性に相応しく、炎系の魔法を得意とするマスターレベルの魔術師だ。現在残っている冒険者の中では唯一人の女だった。
「相手は誰」
ディーが尋ねてきた。
「相手？」
「男に引っ掻かれた訳じゃないでしょう。右の頬にまだ赤く残ってるわよ」
「こいつか」
ディーが言っているのは、昨夜夢魔に爪でつけられた頬の掻き傷だった。消えかかってはいるが、まだ幾筋か跡が浮き出ている。
「ぞくりとくる女だよ。寒気がするほどな」
「へえ」
形のいい細い眉を持ち上げて、ディーは目を丸くして見せた。「朴念仁のあんたにそんなことを言わせる女なんて、あたしも一度会ってみたいもんだわ。機会はある？」
「運が悪けりゃな」
俺はそれ以上この話はしたくないという口調で答えた。
「早く身支度を整えて下りて来い。まだベッドの上にいるのはお前だけだぞ」
「ハイランスの見送りに？」
「誰に聞いた」
俺は少々驚いた。寝ていたとばかり思っていたディーが、先刻決まったばかりの捜索の件を知っているとは。
「あんたに聞いたようなものよ」
ベッドの脇の卓上から灰皿を取り寄せ、ディーは煙管を軽く叩きつけた。赤く燻る火玉がころりと皿の上に転がり出る。「夜中に地震があって、しかもガッシュたちは昨日の日暮に出発。で、まだ朝も早いうちから皆起き出して、あんたがわざわざあたしを起こしに来る。これだけわかってれば、迷宮の中のガッシュたちに何か不都合があったって想像はつくでしょう？　でも、悪のあたしたちは身動きが取れない。となると捜索隊を組織しそうなのはハイランスくらいのものじゃない」
「大したもんだ。たまげたよ」
俺はお世辞抜きに言った。エルフという種族は物事を整然と考え、結論を導く能力に長けている。それも常日頃から知力を磨いている魔術師ともなれば、この程度の推理などお手のものなのだろう。
その時、食堂で聴いた呼び子の音が再び響いた。
今度は、出発の合図だった。
「お喋りが長過ぎたかしら」
「どうやらそのようだな」
俺はディーに背を向け、扉を開けた。「詳しい話は下でしよう。それと、王宮に召喚がかかるかも知れねえ。支度をしとけよ」
「あたしも？」
いかにも迷惑そうな口調だった。
「ザザもだろう。女王さまは形式ばったやり方がお好きときてるから、俺たち三人は一組で呼ばれると思うぜ」
「でしょうね」
ディーは嘆息した。「次に謁見するのは、宝珠を手に入れてからだと思ってたんだけど」
「偶然だな。俺もだよ」
言って俺は廊下に出た。
急ぎ、走るように階下に向かう。
俺が正面玄関から中庭に出た時には、三台の送迎馬車の最後の一台が門から出て行くところだった。
残っている冒険者は悪の戒律の者ばかりのためか、見送りに出ている



者はいなかった。ザザもどこに行ったのか姿が見えない。
俺は馬車が門を曲がって視界から消えるまでの短い時間を見送り、空を見上げた。
明け方はわずかに薄日が差していたが、今はもう厚い雲が上空を全て覆い尽くしている。遥か北西の空には、ひっきりなしに青白い稲光が疾っているのが見える。
相変わらずの異常気象だった。あの稲妻がこの都市の真上に移動して来ないよう願うばかりだ。
岩山はいつもと変わらぬ無表情な外見で、真北の空を圧して聳え立っていた。
昨夜の発光現象の形跡はどこにも残されてはいない。だが、俺の目には夜空に浮かび上がった山頂の輪郭と、血の色にも似た赤い光がはっきりと焼きついている。
あそこで一体何が起こっているのか。
ガッシュ、ボルフォフ、そしてフレイ。
連中は無事なのだろうか。
ふと、俺の脳裏に思いもよらぬ男の顔が浮かんできた。
俺は思わず苦笑した。
そいつは、マイノスの顔だったからだ。
自分で思っていたよりも、俺は他人思いの甘い人間なのかも知れない。よりにもよってあのマイノスの消息までが気にかかるとは。
馬車の車輪が石畳を踏む、重い軋み音が小さくなっていく。俺の聴力を考えれば、もうかなり遠ざかってしまったようだ。
その音を聴きながら、俺は奇妙な仮定を思い浮かべていた。
もしハイランスの率いる捜索隊がいなかったら——つまりガッシュたちの消息を確かめられる者が他にいない場合、俺は迷宮に向かっただろうか。第二、第四層に入れないということを抜きに。
結論を出す前に、俺はその仮定を打ち消した。
馬鹿な話だ。
自分の欲望のままに生きるからこそ、俺の戒律は悪なのだ。他人を救うために、自らの生命を危険に晒したりはしない。たとえ死にかけた者を目の前にしても、得にならない手助けはしないものなのだ。
こんなことを考えるだけでも、悪にとっては馬鹿げている。思い悩む以前の問題だからだ。
俺は踵を返した。と同時に、この不似合いな思いをきれいさっぱり忘れてしまうつもりだった。
だが、昼過ぎに王宮の使いがやってくるまで、何故かその仮定が答の出ぬまま頭にこびりついていた。

リルガミン王宮は、東西約四キロメートル、南北三キロメートルに広がるこの都市の中央やや北寄りに位置している。
広い濠に囲まれた、王城によく見られる雲つくような尖塔や天守閣などがないおとなしい造りの城だ。百年前に建てられた市内では最も新しい建造物のひとつで、当時の統治者マルグダ女王の好みが反映されているという。
かつて僭王ダパルプスによって奪われ、魔窟と造り変えられた旧王城はアラビク王子とダパルプスの決戦の際に崩壊し、魔物の巣喰う広大な呪いの穴と化した。が、ダイヤモンドの騎士たちの活躍によってグニルダの杖が奪還された後は魔も去り、今では彼らの功績を称えるべく無人の地下迷宮が残されている。
現在の王宮は、この敷地に規模を縮小して再建されたものなのだ。千年余の歴史を誇った旧王城の面影を残す、美しい白亜の宮殿だった。
俺とザザ、そしてディーの三人は、迎えの小型有蓋馬車に揺られながら、その王宮の南門に続く跳ね橋を渡ったところだった。
いつもの迷宮への送迎馬車とは比べものにならないほど乗り心地は良かったが、楽しそうな顔をしている者はいない。ザザの表情はにこやかに見えるがこれはいつものことで、決して王宮への召喚を喜んでいる訳ではないのだ。
さすがにディーも身なりを整え、迷宮には決して着て行かない正装用の濃紺のローブを着用している。同性の羨望の的となる長い緑の髪は邪

風よ。龍に届いているか

魔にならぬよう高く結い上げてあり、これで厭そうに寄せた眉を何とかすれば、王室に溢れるほどの敬意を抱く模範的な市民のように見えそうだった。

俺は着替えてはいるがいつもと変わらぬ濃緑色の装束で、ザザも特別のものではない白い法衣を身に着けている。ディーと並ぶと明らかに見劣りしそうだが、ベイキの小娘に会うために着飾ってやるつもりはないし、第一俺はこれまで礼服など着たことはないのだ。それに、見栄を張るのはいつだって女の仕事だ。

門を抜け、王宮の入口になる広い階段の前に横づけして馬車は止まった。馬車から下りた俺たちを、青い制服とサーベルで形式的に武装した人間の衛士数名が出迎え、城の中へと案内する。

青紫の絨緞が敷かれた城内は、いつもながら不気味なまでの静けさが漂っていた。王宮とはそうしたものなのかも知れないが、俺はここを訪れる度にこの静寂に違和感を覚える。もう少し騒がしいほうがかえって落ち着きそうなものだ。

女王との謁見はホールで行われると聞いていた。

「お付きの衛士隊を従えた女王様の姿が目に浮かぶようね」

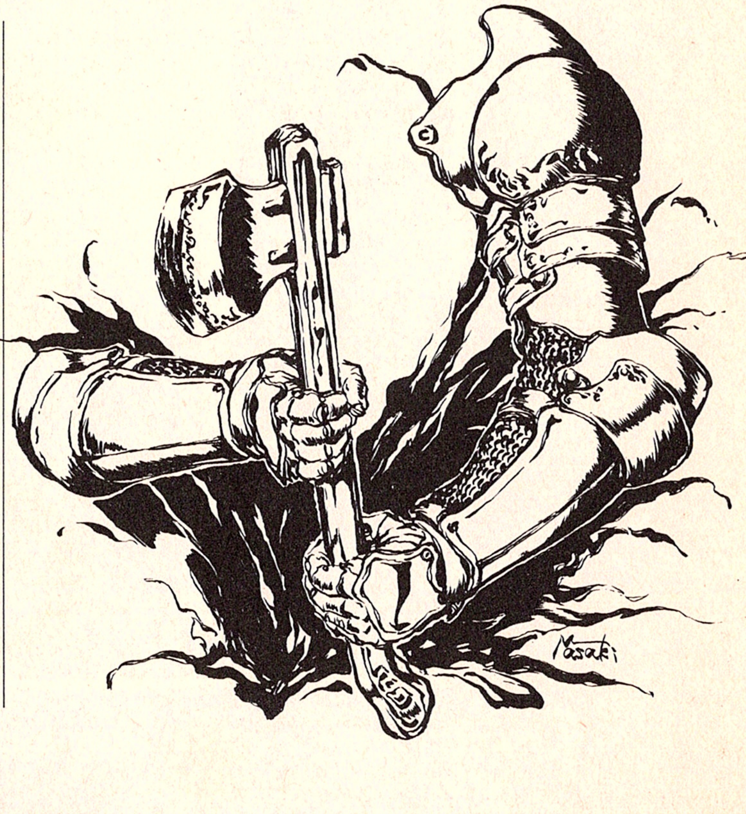
ディーは俺に囁いたが、しんとした回廊にその言葉は予想外に響き、慌てて口を噤んだ。王宮内で女王を批判するのは少々危険な行為だ。

やがてホールの巨大な扉が近づいてきた。俺たちが進むにつれて、扉が少しずつ内側に開いていく。

正面に、玉座に腰掛けた女の姿があった。

弱冠十七歳のリルガミン王国統治者・ベイキ女王だった。

（次号につづく）



あとがき

第五章から、これまで続けてきた手書き原稿をやめて、遅ればせながらワープロを使うことにしている。

悪筆ということもあるのだが、何しろ書いては消し、書いては消して文章を推敲していくたちなので、ますます他人には読みづらい原稿になってしまうからだ。万年筆やボールペンで書いた場合原稿用紙がどうなってしまうのか、考えただけでも恐ろしくなってしまう。

それにもともと横書きの原稿用紙が好きなので、ワープロのあの書式には馴染みやすいということも理由のひとつだ。

で、現在はキャノワードα350を自宅に置き、事務所のPC―286の一太郎とデータの互換性を持たせて使用している。

感想を述べるなら、数年前使っていて厭になった文豪ミニ5Eに比べて遥かに使いやすくはなった。しかし最新機種でこれでは、とすら思ってしまうところもまだまだ随所にある。これから買おうかと思っている人は、もうちょい様子を見るべきかもね。

でも、誤植は減りましたねえ。読みやすさがやはり一番のメリットかな。

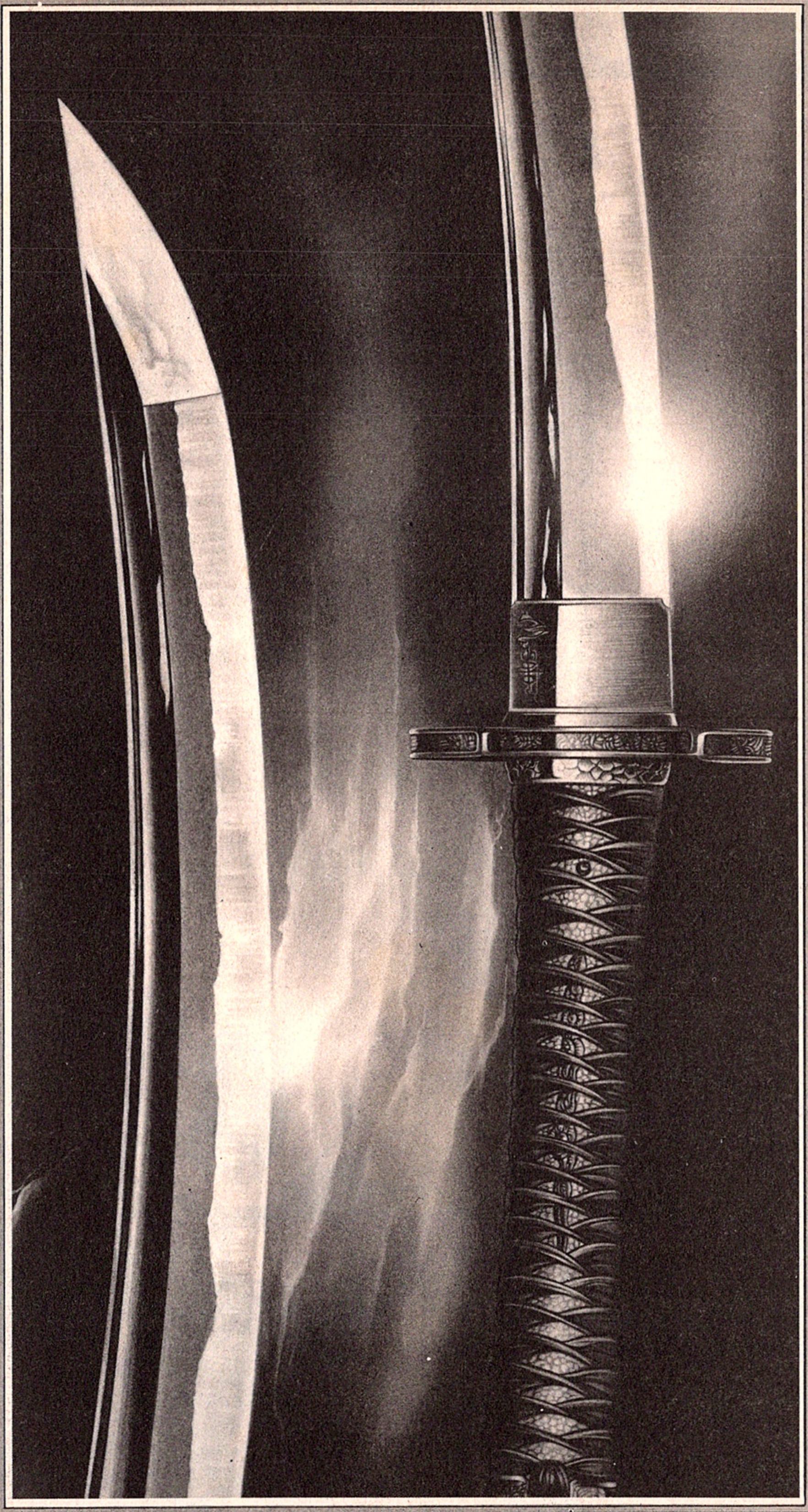
では、また次号。

（ベニー松山）

ファミコン必勝本 Vol.3
とじこみスペシャル

特報!! ウィザードリィ外伝①ギルの迷宮 単行本化決定!! 2月下旬発売予定

●確実に手に入れたい方は予約注文書(アンケートハガキについています)に記入してお近くの書店に渡して下さい。



●コミック版
ウィザードリィ外伝
――ギルの迷宮
作/石垣環

●小説ウィザードリィII
風よ。龍に届いているか
作/ベニー松山
イラスト/高橋政輝

▶コミック版ウィザードリィ外伝・ギルの迷宮は反対ページ(P92)からお読み下さい。